タイ語母語話者の日本語アクセント習得における「意識」の役割

スィリポンパイブーン・ユパカー

1. はじめに

アクセント習得における学習者の意識を捉えた先行研究はいくつかあげられる。磯村（1996）、法貴（1997）はともに学習者にアクセントを意識させる指導を行ったことで、学習者のアクセント発話やアクセント聞き取りに向上が見られたと報告している。また、中川（2002）はアクセントの聞き取りにおいて、意図的でなければアクセント型を判断するのは難しいことを示し、これによってアクセントについての意識化が必要だとしている。

以上のように先行研究では、アクセントへの「意識化」が有効、または必要であると指摘されている。しかし、学習者が意識的にアクセントを産出しよう、習得しようとしている場合、具体的にどのようなストラテジーをとっているのかという点についての調査はあまり行われていない。また、どんなストラテジーが習得に直接寄与するのか、という「ストラテジー使用と習得との関係」もまだ明らかにされていない。

一方、スィリポンパイブーン（2005）は来日直後のタイ語母語話者（大部分がゼロビギナー）を対象に、1）学習者が「意識」を持ってアクセントを産出しようとしているかどうか、2）学習者の実際に産出した単語音調パターンの実態がどうなっているかを調べた。その結果、アクセント産出についての「意識」を持っている学習者グループの方が、そうでないグループより、「東京方言としてありうる音調パターン」の出現率が高かった。つまり、アクセント産出についての「意識」を持っている学習者のほうが、より自然な日本語音調パターンに近づいていると言える。

2. 研究の目的と課題

スィリポンパイブーン（2005）で示された見解を踏まえ、本研究では以下 2 つの目的を設定した。

1. 様々な学習レベルにあるタイ語母語話者を対象に調査を行い、「意識的学習はアクセント習得にどの程度有効なのか」を確認する。具体的には意識的学習者と無意識的学習者の、それぞれのアクセント正用率を調べ、またその正用率と日本語学習時間が関連しているかどうかを調べる。

2. 意識を持ってアクセントを習得しようとする学習者は具体的にどんなストラテジーをとっているのかを調べる。

3. 本研究における「意識」の定義

本研究において「意識」とは、アクセントに関する宣言的「知識」（例：「日本語アクセントは高低アクセントである」、「単語ごとに決まっていて、覚える必要がある」、「複合語になるとアクセントが変わる」）に基づき、自覚的にアクセントを産出し、習得しようとする意思であると定義する。

4. 調査の概要

4.1 調査対象者

バンコクの大学及び民間日本語学校で日本語を学習しているタイ語母語話者で、男女 13 人[1]を対象とした。年齢は 18～25 歳で、日本語学習時間は約 18～1900 時間である。

4.2 調査方法

以上の学習者に対し、具体的に以下のような 4 つの方法で調査を行った。

4.2.1 アクセントに関する「知識」の調査

磯村（2000）を参考に、日本語のアクセントに関する各種命題（例：「日本語のアクセントは高低アクセントである」、「複合語になるとアクセントが変わる」など）を 14 項目設定し、それを知っている

かどうかを二者択一式のアンケートによって調べた。また、自己申告の回答では信頼性に欠けるため、知識がどの程度確実なものであるかを確かめるフォローアップ・インタビューも行った。

4.2.2 アクセントの学習ストラテジー調査

Oxford（1990）を参考に、アクセント学習に関するストラテジー（例：「新しい単語を習った後、再び自分でその単語のアクセントを声に出して練習する」、「アクセントを覚えるために、単語に高低を区別するための印をつける」、「先生や日本人にアクセントをチェックしてもらう」など）を18項目設定し、「する」・「しない」・「答えられない」のいずれかを選ばせた。また、学習ストラテジーに関してもフォローアップ・インタビューを行い、学習者は具体的にどのような行動を、どのように、どの程度行っているかを詳細に調べた。

4.2.3 アクセントの産出・習得における「意識」の調査

4.2.1，4.2.2のインタビューと並行して、それぞれの学習者がアクセントの産出、習得において意識的かどうかを調べるために、「日本語を話すとき、アクセントをつけて発音しようとするか、各単語の高低パターンを考えるか」、「アクセントを間違えた場合、気づいたことがあるか」など直接的に「意識」の有無を問う質問及び、「アクセントをどのように覚えているか」、「アクセント学習のために、なにか工夫をしているか」、あるいは学習者本人の音声を再生し、「なぜこのような音調パターンで発音したか」など間接的な質問もした。

4.2.4 タイ語母語話者が産出した単語音調パターンの調査

それぞれの学習者が実際にどのような音調パターンで個々の単語を発音するのかを調べるために、刺激語（1拍語から5拍語まで計64語）を含む短文を学習者に読み上げてもらい、録音した。そして録音した各単語の音調パターンを観察し、分類した。分類にあたっての高低パターンの判定は基本的に、筆者ともう一人の日本語母語話者の聴覚的印象に拠ったが、音声分析ソフト(wavesurfer)によるピッチ曲線の観察も並行して行った。

学習者の産出した音調パターンは、まず、東京方言として「ありえない音調パターン」と「ありうる音調パターン」の2つに分けた。前者はさらに、「デフォルト」と「デフォルト以外」に分けた。「デフォルト」とは、「全部の拍が同じ高さか、最後の拍だけが下がるパターン」のことを指し、これは大西(1977)において、アクセントについてよく知らない初級タイ人学習者の発話に現れやすいと指摘されている音調パターンである。また後者は、その語のアクセント型とは一致しない場合を「不一致」、一致する場合を「一致」[2]として分けた。

5. 結果と考察

5.1 アクセントに関する「知識」の調査結果

調査対象者のほぼ全員が、「日本語にはアクセントがある」、「日本語のアクセントは高低アクセントである」、「アクセントは地方によって違う」、「単語の意味を区別する（雨－飴など）」という知識を持っていた。また大部分の人が「アクセントは単語によって決まっていて、覚える必要がある」ということについても知っていると答えていた。

5.2 アクセントに対する「意識」の調査結果

インタビューの中で、「日本語を話すとき、アクセントをつけて発音しようとする」、「各単語の高低パターンを考える」、「間違いに気づいたことがある」などという回答や、アクセント学習における認知的思考、行動についての明確な説明が現れた場合、その学習者は「意識」をもっていると判定した。

結果として、11人中4人が「意識」を持っていると判定された。以下「意識有り（例1,2）」、「意識無し（例3,4）」を判定する根拠となった発話例[3]を示した。＜＞内は筆者が補った部分である。

例 1：単語の意味はもちろん覚えなければなりません。更に、アクセントについてはなるべく記号をつけておきます。最初のころは＜アクセントを＞考えますが、時間が経つと慣れてきて、考えなくてもできるようになります。（X13M）

例 2：2拍語の「うし」とかはまず、発音します。そして一つの単語を基準にします。それから他の2拍の単語をどのように発音したらいいか、これらの基準と照らし合わせます。（101F）

例 3：日本語を話すときは、ほとんどアクセントを考えたことがありません。慣れで発音しています。それより、聞き手に伝えたいことを分かってもらおうと努力します。（307F）

例 4：単語を思い出すと、アクセントを考えずに言ってしまいます。単語を思い出すだけでも大変で、アクセントまで考える余裕がありません。

(410F)

5.3 「意識」の有無・アクセントの習得度・学習時間との相互関係

それぞれの学習者が発音した単語音調パターンの出現割合を表1に示した。東京方言としてありうる音調パターンに着目し、「意識」を持っている場合と「意識」を持っていない場合にわけて、その産出率を高い順に並べた。

無意識的学習をしている学習者の場合は、学習時間が長くなるほど、東京方言としてありうる音調パターンの産出率が高くなる。学習者は学習時間とほぼ平行して、より自然な日本語を身に付けると言える。一方、意識的学習をしている学習者の場合は、学習時間との関連性が見られない。学習時間がわずか160時間の101Fでも、一番習得度の高いX13Mに次ぎ、高い正用率を示している。

5.4 習得度の高い学習者の特徴

アクセントの習得度が特に高かったX13Mと101Fが、具体的にどのような学習ストラテジーをとっているかを、インタビューにより探った。両者に共通して見られた特徴は3点にまとめられる。

1) 日本語アクセントの高低を聞き分ける基準を持っている。101Fは、高低の差が一番はっきりしている2拍語をベースに考え、高い拍に注目して、それが前に来る（具体例：猫、船）のか、後に来る（具体例：そこ、あそこ）のかを、聞き分けている。つまり、101Fは拍と拍の間の高低の違いに注意をむけて聞いていると考えられる。一方、X13Mはタイ語の5つある声調[4]の中、level toneであるlow toneとhigh toneを基準にして、日本語アクセントを聞き分けている。

2) 意識的な自己モニターを行っている。具体的には、単語のアクセントを予測した上で、日本人がその単語をどのように発音しているかを確認し、
自分が予測したアクセントと比較して、予測が違っていた場合は自分のアクセントを修正している。

3) アクセントを明確な知識として覚えるために音声的側面を独自の記号を用いて、記号化している。戸田（2005）も、このストラテジーは発音習得のgood-learnerがよく使用していると報告している。

これらの特徴から、習得度の高い学習者はアクセントを正しく発音できるようになるためには何をしなければならないか（つまり、どんなストラテジーを使うべきか）ということを認識し、具体的な行動を起こし、またその行動が有効かどうか、効率化を図るためにメタ認知能力を活性化させ、自分の学習過程をモニタリングしていると考えられる。

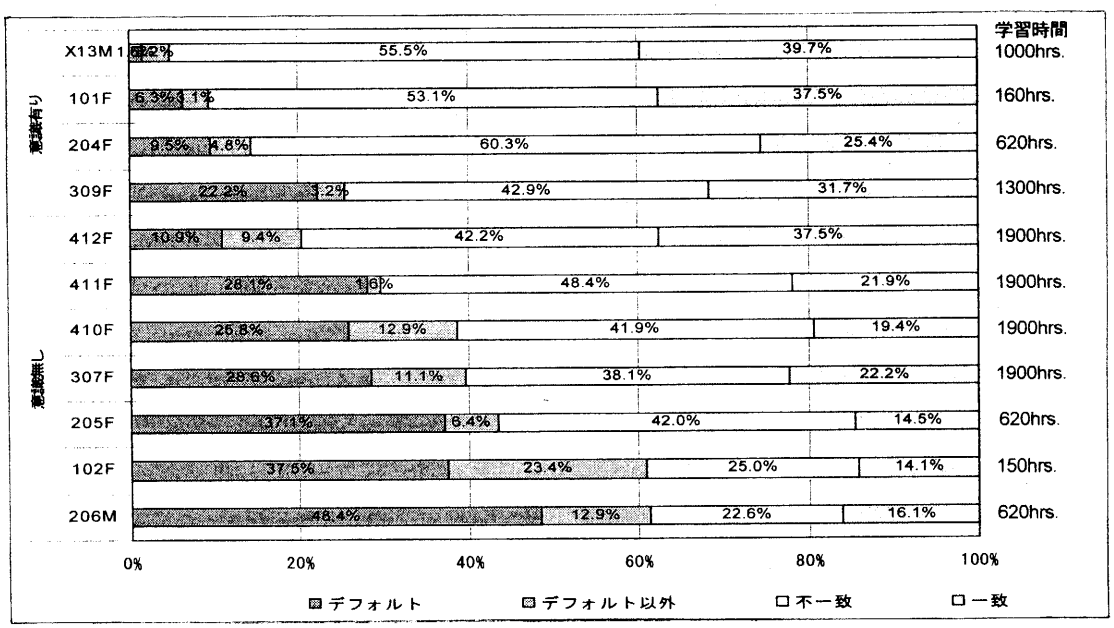
6. まとめ

1) アクセント習得において、無意識的学習者の場合は、学習時間と東京方言としてありうる音調パターンの出現率との間にほぼ平行的関係が見られた。この場合は、時間をかけなければ正用率が上がらないと予想される。一方、意識的学習者の場合は学習時間が短くても高い正用率を示すことがある。

2) 習得度の高い学習者はアクセント習得において、「アクセントの高低を聞き分ける基準を持っている」、「意識的な自己モニターを行っている」、そして「音声的側面を記号化し、記憶している」という特徴が見られた。

この自己モニターや記号化のストラテジーは教室活動においても応用できるだろう。具体的には学習者同士による発音評価やアクセントの聞き取りにおける記号化トレーニングなどが考えられる。これらの活動を実際に現場に取り入れていくこと、また本研究の知見を広く一般化するためにサンプル数を増やし、更に調査することを今後の課題にしたい。

表1：アクセントへの「意識」の有無・アクセントの習得度・学習時間との相互関係



注

1. アクセントに関する「知識」および「意識」について不明な2人を除いて、分析の対象11人となった。
2. 「一致」とは「正用」に言い換えられる。
3. タイ語での発話を筆者が日本語に翻訳した。
4. タイ語の声調はlevel toneが3つ（high tone, mid tone, low tone）、contour toneが2つ（falling tone, rising tone）ある。

参考文献

磯村一弘（1996）「アクセント型の意識化が外国人日本語学習者の韻律に与える影響」『日本語国際センター紀要』6，1-18.

磯村一弘（2000）「海外のノンネイティブ教師からみた日本語音声教育―語アクセントの教育を中心に―」第2回日本語音声教育方法研究<http://www.isomura.org/myself/resume/2000.html>2005年11月10日参照

大西晴彦（1977）「タイ人のアクセントに関する若干の考察」『国際学友会日本語学校紀要』2，24-44. 国際学友会

スィリポンパイブーン・ユパカー（2005）「日本語アクセントに関する知識と意識との関連―来日直後のタイ語母語話者の場合―」『日本語教育方法研究会誌』Vol.12, No 2, 14-15.

戸田貴子（2005）「第二言語における発音習得プロセスの実証的研究<http://www.f.waseda.jp/toda/dat/kaken01.pdf>2005年11月24日参照

中川千恵子（2002）「東京語アクセント習得順序と学習者の意識」『講座日本語教育』第38分冊，73-93.

法貴則子（1997）「アクセントの意識化を目指した授業」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』23，83-96.

Oxford, R.L. (1990) *Language learning strategies : What every teacher should know*, Newbery House, A Division of Wadsworth, Inc.（宍戸通庸・伴紀子訳 1994『言語学習ストラテジー』凡人社）

すぃりぽんぱいぶーん　ゆぱかー／政策研究大学院大学　日本言語文化研究プログラム

lekjajp@yahoo.co.jp